

目次

ページ

学術講演会	1
第2回都市計画研究会	3
倉敷市のまちづくりを考える ~ 中心市街地の持続的な発展に向けて ~	4
H24年度支部地域活動助成事業報告 四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会	5
九州支部との研究交流	7
第7回ひろしま自転車トーク2012	8
講演・シンポジウムなど	9
時代を語り建築を語る会	10
ホットコーナー・コラム	14
会員紹介	19
今後の活動予定	20
編集後記	20

平成24年度 学術講演会

日時:平成24年12月1日(土) 17:00~19:30
場所:広島修道大学 7号館学術ホール
テーマ:都市戦略としての「デザイン都市・神戸」の取
り組みから広島の都市戦略を考える

プログラム:

1. 講演「デザイン都市・神戸の取り組み」
神戸芸術工科大学学長・神戸市統括監
齊木崇人 氏
神戸市統括監(「デザイン都市・神戸」のさらなる
推進のため、各部署で行なっている施策のうち「デ
ザイン都市・神戸」に位置付けられる事業について、
横断的に統括する役割を担う)

2. 話題提供「広島市・将来のまちづくり」
広島市 都市整備局 都市計画担当部長
新上敏彦 氏

3. ディスカッション
コーディネーター:三浦浩之氏
(広島修道大学人間環境学部)

主催:公益社団法人日本都市計画学会中国四国支部

後援:広島市,公益社団法人土木学会中国支部,
一般社団法人日本建築学会中国支部

参加者:100名

今年度の学術講演会は、「デザイン都市・神戸」の実現に
向けて、各部署での施策を横断的に統括する「統括監」と
いう役割を担われている、齊木崇人氏を招聘して開催され
た。さらに、広島市の最新の取り組みや計画について、広
島市都市整備局都市計画担当部長 新上敏彦氏に話題提供
をいただいた。ディスカッションでは、会場との意見交換
もあり、広島市の都市戦略について、ともに考える機会とな
った。ここではその概要について報告する。

1. 講演「デザイン都市・神戸の取り組み」

齊木崇人 氏

神戸と広島の共通
点は陸からだけでは
なく、海からの見方
を歴史の中で取り続
けてきていることで
ある。今日をきっか
けに、両都市で実験
的な取り組みができた
ら良いと考えている。



1868年、開港時の神戸は、人口約3万8千人で、現在の
居留地には何もなく背後の六甲山も禿げ山であった。開
港以来、居留地が形成され、六甲山は緑豊かな山に変わり、
終戦間際には100万人の都市となった。神戸は、都市基盤
のない沼地のようなところに、一気に住宅が建てられ、ま
ちができたといえる。開港のころ、まちには水道が必要で
あったが、禿げ山では保水力がなく水を生み出すことはで
きないために棚田をつくり、木を植えた。これが神戸の都
市計画の始まりだったと、私は理解している。六甲山は植
樹から10年で緑豊かな状態に再生された。しかし、その
後神戸は、幾度も水害や戦災、阪神・淡路大震災などで打
撃を受け、そのたびに復興を果たしている。

震災後、神戸芸術工科大学は、多様な被災状況や復興状
況について、神戸が持つ素地からもう一度捉え直そうと調
査を始めた。調査を通して、復興の過程でコミュニティの
力、新しい人を受け入れる力が磨かれたことがわかった。

現在の都市戦略に至るまでの事例として、167集落が存
在する北区・西区の田園地域で展開している、「人と自然の
共生ゾーン条例」を紹介する。神戸市や京都大学と共に策
定したもので、集落を里づくりの拠点と捉え、都市の土地

利用について、すべて意図を持った計画地で構成しようという提案である。現在159集落が里づくり協議会を設立し、この条例に従い活動している。また、このときに現地調査イメージ共有 景観計画作成という一連の手法を開発することができた。

次に、空き家の増加や高齢化が進むニュータウンの問題に対する取り組みを紹介する。ゴルフ場跡地を住宅地とする「舞多聞^{まいたもん}みついかプロジェクト」である。このプロジェクトは、都市再生機構と神戸芸術工科大学、そして未来の住民が連携して進める、自立した持続可能な地域コミュニティの実現を目指している。ここに住まわれる68世帯とともに、コミュニティづくりや、各世帯のプランと模型、緑地・建築協定を作成した。現在、住民がこの協定をいかに運用していくかにチャレンジしている。

神戸市は、「住み続けたくなるまち、訪れたくなる、そして継続的に発展するまち」を目指して、「デザイン都市・神戸」を市民とともに推進している。これは、神戸の新たな都市戦略として、デザインという視点から新たな都市づくりを進めるもので、2012年10月にオープンしたデザインクリエイティブセンター神戸 KIITO はその拠点となる施設である。KIITOのテーマは、コミュニティづくりや創造的に活動をする人材を育成する場であり、クリエイターや事業者、市民の方々の活動の場となることである。

現在のマスタープランは、フィールドワークを行いながら、改めて神戸の特性を捉え直しながらまとめたものである。同時に進行する50近い実践プロジェクトを、デザインを介して横断的に統括することを目指しており、デザイン推進室がその役割を担っている。

デザイン都市の実践は、仮説、事実の把握、実践という持続するデザインプロセスの中で展開されるべきではないだろうか。

2. 話題提供「広島市・将来のまちづくり」

新上敏彦 氏

広島市は、デルタ部で水の面積の割合が約13%、6つの河川を持った「水の都」である。現在、この水辺で、いくつかの取り組みが生まれている。



また、平和記念都市としても知られる広島は、全国初の一都市を対象とする特別法である広島平和記念都市建設法(昭和24年8月6日施行)が適用されており、原子爆弾による被害からの復興の契機となっている。この法に基づいて、平和記念公園や100メートル道路の設置など、平和記念都市として復興を果たした。

広島市はその将来像として、『世界に誇れる「まち」広島』を掲げ、中国地方の発展をリードする活力とにぎわいのある都市、地域資源をいかした個性的で魅力のある集客交流都市、市民が快適に生き生きと住み続けることができる幸

福が増進される都市を3本柱としている。

現在、実施あるいは計画している取り組みには、(1)複合機能拠点の整備(西風新都)(2)公共交通機能の強化(白島新駅、広島駅自由通路・新幹線口広場の整備など)(3)市街地再開発(広島駅周辺地区)大規模未利用地の有効活用(4大跡地)(4)自転車の利便性向上策、(5)自動車専用道路網(広島高速3号線等)の形成などがある。

広島市では、平和記念公園の都市軸が都市づくりの基軸になっている。景観行政としては、景観協議制度に基づいて、看板規制などの景観誘導を行なっている。このように実務的なところで景観をフォローアップしている。

3. ディスカッション

コーディネーター：三浦浩之氏(広島修道大学人間環境学部)

三浦氏をコーディネーターに、会場からの質問も交えた意見交換が行われた。

(齊木氏) 神戸では、ウォーターフロント整備に苦勞している。広島では、水際の景観をどう考えているか。

(新上氏) 港湾エリアには市民に開かれた部分が少なく、市民の関心も薄い。そのような状況の中で、宇品では、古い倉庫を商業施設に再活用し、にぎわいを創出する取り組みが始められている。河川では、河岸緑地において、ベンチの設置、散策ルートの作成、緑地整備を行なっている。

(齊木氏) 神戸では、整備が遅れていた水際がすばらしい可能性を持ち始めた。水際の活性化には、市民や地域にとって役立つ新しい拠点づくり、住空間の提供が必要である。また、神戸市だけではなく都市間で連携して、さらに市民が使いやすい港湾にしていきたい。

(三浦氏) 水辺での居住について、広島市ではどうか。

(新上氏) 広島市民は、水辺に開放された空間や河岸緑地を自由に使いながら住みたいという気持ちが強い。これについては、護岸から200mまでは、景観協議を行いながら公共性を高く保持し、直に水辺に面するところでは、住空間のほかに下層部分に店舗を設けて魅力的な空間をつくることできるように、一定のルールを定めながらの指導を考えている。今後の広島では、居住と合わせて、より複合化された土地利用がなされる必要がある。

(三浦氏) 水辺での取り組みと市民の関係性はどうか。

(齊木氏) 神戸では、県が管理している河川を市のコミュニティがサポートする取り組みがあり、河川に市民が桜の木を植えるプロジェクト「千本桜の会」などが始まっている。木を植えることではなく、活動を通して生まれたコミュニティが、その場所の新しい価値を引き出し、参加する市民が場所に対して誇りを持つことが最も大切。

(新上氏) 広島市では、NPOが実施する6本の川を行き交う水上タクシー「雁木タクシー」がある。護岸では、市民が出資して、市民の名前入ベンチをつくる取り組みを始めている。このようなところから、河川と市民の関係を密にしていきたい。

(三浦氏) 神戸の新しい拠点である「KIITO」は、市民を

巻き込んでの取り組みであるが、手応えはあるか。

(齊木氏) 手応えはある。KIITO は、工事の前に約8ヶ月間、市民に無料で開放した。すると、2000 くらいの人たちがやってきた。オープンしてからは、その人たちがすぐに活動を開始した。また、大阪や京都、東京から人々がやってきている。人のネットワークが想像以上にできている。これからは、その成果をどのように発信していくかなどが大きな課題である。

(三浦氏) KIITO は、市民と行政、その間に建築家などの専門家が入った活動だが、互いが刺激し合っているというところはあるか。

(齊木氏) そこがポイントだと思う。それぞれの専門的な力を市民と行政の活動に活用していくことが必要である。

(会 場) デザイン都市を構想する際に、これまでの計画や実際の建築などが、マイナスに働くことはあったか。

(齊木氏) 震災復興での諸問題を今でも抱えているが、これまでに創ったものをいかに運用・修正するか、といった方向で新しいアイデアや仕組みが工夫される時代がくる。このとき、神戸でできることは多い。そのためには、行政は失敗したということ認めなければいけない。そして、抱えた宿題を明確にして進めていくべきであろう。



未筆ながら、今年度の学術講演会開催に際して、ご多忙にもかかわらずご講演いただいた齊木氏と新上氏をはじめ、多くのご支援・ご協力をいただいた方々に感謝の意を表します。
(文責 小椋 弘佳)

第2回都市計画研究会

災害に強いまちづくり(シリーズ第3回)

テーマ:「震災後の被災者と防災教育」

講師: 山下 祐一 氏(一山コンサルタント代表)

日時: 平成 24 年 11 月 23 日(金) 17:00~19:00

場所: 広島市まちづくり市民交流プラザ/ギャラリーA

主催: 公益社団法人 日本都市計画学会中国四国支部

参加者: 13 名

3.11 東日本大震災の実態やそれから学んだ教訓、震災後1年が経過した現場の実態などについて紹介され、日頃からの自助、公助、共助の大切さ、防災教育の重要性を改めて認識させられたご講演であった。



【講演の概要】

東日本大震災の概要と被害者の実態

地震によって岩盤がずれた領域を「震源域」と言うが、東日本大震災では、三陸沖から茨城県沖までの広範囲において、同時6つの領域が震源域となったケースであり、これほどまで震源域が連動することは想定されていなかった。

日時: 2011.3.11 14:46

震源: 宮城県牡鹿半島の東南東 130km、深さ 24km

規模: マグニチュード 9.0、最大震度 7

震源域: 南北約 500km、東西約 200km、最大 20~30m 以上移動

地震: 海溝型地震(逆断層型)

余震: 震度 4 以上=208 回(10/6 まで)

津波高さ: 8m 以上、最大遡上高 40.5m

浸水範囲: 535km²(市街地 119km²)

震災による被災実態は甚大なものであり、死者 15,870 人、行方不明者 2,814 人、避難者 343,334 人で、全壊家屋は約 37 万戸、半壊家屋は約 100 万戸にも及び、被害額は 16 兆~25 兆円と言われている。(2012.9.10 時点)

地域の人口構成は 60 歳以上が約 31%であったが、死者のうち 60 歳以上が 65.2%を占めるという結果であり、高齢者の被害が多かったことがわかる。高齢者は災害時要援護者と言われながらも実際には要援護されなかった結果であろう。今後、我が国では高齢化社会がさらに進んでいくなか、共助というネットワークを構築しておかなければ災害時には命が守られないということになってしまう。

被災者への補償(保険や義援金)はどうだったのか?

地震保険について見ると、阪神・淡路大震災時の加入率は 9%であったのに対し、東日本大震災時には 23%と向上していた。しかしながら、一軒の平均支払額は 159 万円であり、家を建て直す資金には到底及ばない額で、一部修繕か、借家確保の資金程度にしかならないような状況である。また、大量の自動車の損壊もあったが、これは地震保険では対応できず、日常的な移動手段確保も進んでいない。

次に、義援金であるが、行政職員の不足や住民資料の流出等により「罹災証明書」の交付手続きが遅れており、日本赤十字社と中央共同募金会に寄せられた義援金 3,072 億円も、被災者の手に届いているのは約 4 割程度にとどまっている。また、義援金の 1 世帯平均の配分額について過去

の災害と比較すると、雲仙普賢岳噴火災害が 3,219 万円/世帯、新潟中越地震が 216 万円/世帯、東日本大震災が 58 万円/世帯となっており、被災規模に対して義援金の集まりは少ない。(配布対象者が極めて多いことにもよる。)

震災1年度の災害現場の実態

仙台平野と三陸海岸の災害現場を調査した。がれきの処理は進み、津波被害の様子は次第とわからなくなりつつあるが、学校など、規模の大きい鉄筋コンクリートの建物は、未だその痕跡を残して現場にあるものが多かった。また、仙台平野と三陸海岸では震源の位置や地形的影響による津波被害の差が見られた。高い津波に襲われた三陸海岸の石巻市、旧北上川河口部では右岸側は学校3階部分を超える痕跡がある一方、左岸側は一階部分の住宅も残っているなどの差が見られた。

仮設住宅は、三陸海岸の道路沿いに建てられたものを見たが、近くに商店はなく、車なしでは生活できない不便なところで、生活物資の確保には定期的な配送車等が必要である。また、仮設住宅を出た後、自宅を再建したり、自力で賃貸住宅を確保できない人の受け皿として自治体による復興住宅の建設が計画(2016年度松までに岩手県で約4,000~5,000戸、宮城県で約12,000戸)されているが、着工しているものは少なく、入れるのは限られた人である。

防災教育の重要性

釜石市沿岸部にある9つの小中学校では全児童生徒が気象庁や行政の災害情報を待たずして地震直後に避難行動を開始していた。これは、釜石市で防災教育・訓練を指導してきた群馬大学の片田教授により調査・確認された避難の成功例であり“釜石の奇跡”と言われ注目されている。片田教授は防災の考え方(避難の三原則)を以下のように述べている。

想定にとらわれるな!・・・ハザードマップを信じるな、想定に縛られてしまう。
最善を尽くせ!・・・「ここまでくれば大丈夫だ」だけではなく、そのときにできる最善を尽くし、さらに高台へ。
率先避難者たれ!・・・いざという時はまず自分が避難すること。その姿を見て、他の人も避難するようになる。結果的に多くの人を救うことになる。

災害多発地域での防災意識の高揚・啓発は極めて重要であり、ここ中国地域でも若い世代からの底上げ、高齢者への意識啓発を目指して、自分自身(山下氏)も活動しているところである。これまで、小中学校で18箇所、高齢者を対象とし9箇所で行った防災教育を実施し、その活動を通じて次のようなことがわかった。

“災害・防災に対する知識は低いのが現状” “一方、防災教育を実施に行くとその時点での効果は直接表れる”

“防災教育は継続性(繰り返し行うこと)が重要” “また、防災教育の内容を変化させたり、深めるための研究も必要” “さらに、防災教育における産官学のネットワーク構築の検討も必要” という点である。

今後は3.11東日本大震災の教訓を活かしながら、日頃からの備えと、被災時の対応、災害の伝承、災害の予測といったことを視点に置きながら地域社会のリスクマネジメントを進めて行かなければならない。

(文責: 高田 禮榮)

倉敷市のまちづくりを考える～中心市街地の持続的な発展に向けて～

日本都市計画学会中国四国支部設立10周年記念リレーシンポジウム 倉敷

中国四国支部設立10周年を記念したリレーシンポジウムが3都市にて開催された。これまで米子(2012年5月)、高知(同年8月)で開催され、同年11月25日(日)に「倉敷市のまちづくりを考える～中心市街地の持続的な発展に向けて～」と題して、倉敷市の倉敷公民館にて開催された。

1 本シンポジウムの開催趣旨とプログラム

2011年12月のJR倉敷駅前の大規模ショッピング施設のオープンやそれら買い物客による近隣商店街、観光エリアへの回遊行動の発生など、いま岡山県倉敷市の中心部は大きく変貌を遂げようとしている。このような状況をふまえて、「倉敷市中心市街地の持続的な発展」をテーマに、倉敷市のまちづくりに尽力する産学官民さまざまな方々をお招きして、倉敷ひいては、わが国の地方都市が抱える課題や今後のまちづくりの方向性について議論する。

シンポジウムの内容は以下の通りである。

午前: 見学会(倉敷駅周辺部)

午後: シンポジウム

基調講演 倉敷中心市街地活性化について

岡荘一郎氏(倉敷商工会議所会頭)

話題提供 倉敷駅周辺のまちづくり

河田育康氏(倉敷市副市長)

パネルディスカッション

倉敷市中心市街地の持続的な発展を考える

2 見学会

倉敷市都市計画課職員の方々(寺内隆氏、原孝史氏)のご案内により、倉敷みらい公園及び大規模ショッピング施設、JR倉敷駅と美観地区をつなぐ商店街、美観地区内にある旧林商店をリフォームして作られた複合施設「林源十郎商店」の見学を行った。大学教員、自治体職員、コンサルタント、学生など15名程度が参加した。参加者は、職員の方々の説明に対して熱心に耳を傾け、都市景観や都市・交通計画などそれぞれ専門家の立場から数多くの質問がなされた。

3 シンポジウム

初めに、倉敷市商工会議所の岡荘一郎氏より、倉敷市中心市街地活性化に向けたまちづくりの取り組み、その中でもくらしきTMO(Town Management Organization)のまちづくりを中心に講演頂いた。くらしきTMOの活動はとても幅広いが、古くから賑わっていた倉敷の「定期市」を蘇らせた「くらしき朝市(三斎市)」は、月に一度の開催ながら中心市街地に多くの人々を呼び込む大規模なイベントとして確立している。その他、午前中に見学したばかりの「林源十郎商店」のプロジェクト実現に至るまでの逸話などを、岡荘一郎氏の熱い気持ちで伝わる語り口でご紹介頂いた。

次に、倉敷市の河田育康氏からは、倉敷中心部のまちづくりの歴史や町並み保存に向けた行政としての取り組み(美観地区周辺の夜間景観照明事業や、電柱類地中化事業等々)を写真や地図などを織り交ぜながら視覚的にご説明頂いた。

その後、「倉敷市中心市街地の持続的な発展を考える」と題して、パネルディスカッションが行われた。阿部宏史氏(岡山大学教授)をコーディネーターに、岡荘一郎氏や河田育康氏に加えて、坂口正行氏(倉敷まちづくり株式会社顧問)、中村泰典氏(NPO 法人倉敷町家トラスト代表理事)、今井真貴子氏(旅館御園専務取締役)さらに本学会からは松波龍一氏(前中国四国支部長)をお招きして、産学官民の多彩な方々にご議論いただいた。具体的には、坂口正行氏からは、中心部の交流人口を増加させるためのポイントについて、中村泰典氏からは、中心部に現存する町家の再生や利活用の取組みについて、また今井真貴子氏からは、美観地区内で実際に老舗旅館を営むご経験から「観光とまちづくり、おもてなし」の視点からそれぞれご意見をいただいた。松波龍一氏からは、倉敷“外”からの視点として、倉敷市のまちづくりを(他都市とは異なる)「点からのまちづくり」の成功例であるとし、独自性が極めて高い取組みであるとの意見を頂戴した。最後に、コーディネーターである阿部宏史氏から、倉敷市の歴史的、文化的なまちづくりの基礎には、これらパネリストのように「まちづくりに対する誇りや熱い思い」があること、そして、本シンポジウムのキーワードでもある「持続的なまちづくり」には、これらが欠かせない要素であること等が述べられ、本シンポジウムは幕を閉じた。なお、本シンポジウムの参加者数は80名程度であった。

(文責:氏原 岳人 岡山大学大学院環境生命科学研究科)

H24 年度 支部地域活動助成事業報告

四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会

日時:平成24年10月29日(月) 13:30~17:15
場所:高松丸亀町老番街 東館4階 丸亀町レッツホール
プログラム:
第1部:情報交換会(13:30~15:15)
第2部:まちづくり説明会・見学会(15:30~17:15)
参加者:27名

四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会

<2012年度 日本都市計画学会中国四国支部 地域活動助成事業>

開催日時	平成24年10月29日(月) 13:30~17:15
会場	高松丸亀町老番街 東館4階 丸亀町レッツホール (地図は別途参照)
受け付け開始	13:00
プログラム	<p><情報交換会>13:30~15:15</p> <p>① まちづくりに関する最近の話題 (四国地方整備局建設部 都市調整官 清川喜博氏)</p> <p>② 東かがわ市の人口減少問題と対応策 (東かがわ市総務部政策課 竹田誠一 香川大学大学院 高宮 勲)</p> <p>③ GISを活用したまちづくり (徳島大学大学院 渡辺公次郎)</p> <p><まちづくり説明会・見学会>15:30~17:15</p> <p>丸亀町商店街再開発の最近の動向について (高松丸亀町商店街振興組合 理事長 吉川康造氏)</p>
懇話会	17:30~19:30 参加費:レジャーロ(丸亀町老番街) 14,500円(予定)



参加無料

主催:(公益社団)日本都市計画学会 中国四国支部

徳島大学近藤先生からの申請を受け、四国地方整備局建設部のご協力を頂き、2012年度地域活動助成事業として「四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会」を開催した。四国地方整備局・常法建設部長のあいさつに続き、情報交換会(3件の話題提供)、高松丸亀町商店街組合・吉川康造理事長によるまちづくり説明会・見学会を行った。

<情報交換会> 13:30~15:15

(1)まちづくりに関する最近の話題

(四国地方整備局建設部 都市調整官 清川喜博氏)

清川氏からはまちづくりに関する最近の話題として、まず平成23年12月に施行された「津波防災地域づくりに関する法律」について説明があった。言うまでもなく、3.11以降、津波防災に対する必要性が高まっている。本



法律は、将来起こりうる津波災害の防止・軽減のため、全国で活用可能な一般的な制度を創設し、ハード・ソフトの施策を組み合わせた「多重防御」による津波防災地域づくりを推進することを目的とするものである。現在、基本指針に基づき、全国の都道府県で津波浸水シミュレーションを実施し、その結果を公表し始めているところである。今後、市町村をベースに具体的な推進計画が作成され、津波防災地域づくりの実施が予定されている。次に、「都市の低炭素化の促進に関する法律」(平成24年9月公布)、「都市再生特別措置法の一部を改正する法律」(平成24年7月施行)について説明があった。後者については、都市の再生拠点として、都市再開発事業等を通じて、緊急かつ重点的に市街地の整備を推進する地域を全国で11地域が指定されており、四国では高松市が唯一指定されている。今回の改正にあたっては、備蓄等の促進を図るため容積率規制の緩和などが新たに織り込まれたとの説明があった。最後に施策関係として、都市地域・総合交通戦略、歴史まちづくりの説明がなされた。質疑応答においては、こういった法律を通して地方都市に補助金が回ってくるのは有り難いが、その政策の効果をどのように今後評価していくのか、また地方都市ではこういった国の政策を有効活用していくための人材が不足しているが、国からの人材支援はないのかといった質問がなされた。加えて、防災地域づくりを志向すると都市は分散型になりがちであり、低炭素のまちづくりと矛盾する可能性があるといった指摘もなされた。

(2) 東かがわ市の人口減少問題と対応策

(東かがわ市総務部政策課 竹田誠一氏 香川大学大学院 高塚創氏)

竹田氏からは、香川県内の市としては唯一全域が過疎地域と指定されている東かがわ市が抱える人口問題とその対応策について報告があった。この研究においては、若者の地元居留意識に関して、親の意向、地域愛着心、仕事の三要因が有意に効いているか否か、地域愛着心や仕事観はどういった要因から形成されるかをアンケート調査から明らかにし、若者定住についての政策提言を行うことが目的とされている。その結果、三要因は有意な影響を及ぼしていることが明らかになり、その結果を踏まえ、子どもと親が楽しく過ごせる家庭環境を育む支援、就職支援等の強化、自己実現の仕事観、地元の良さを考える支援が、具体策として提案された。そのうち、とに関しては、「ふるさと就職推進センター」、「若者住宅取得補助事業」が、昨年度から実際に市で実施されており、小規模ながらそれなりの効果が見られるということが報告された。質疑応答においては、地方都市においては、これから人口の取り合いが激化することが予想される、自然増をいかに



実現するかが重要だといった指摘がなされた。

(3) GISを活用したまちづくり

(徳島大学大学院 渡辺公次郎氏)

渡辺氏からは、GIS(地理情報システム)がどのようにまちづくりに活用されるかといった問題意識の下、災害危険性を考慮した開発規制地域の評価、ウェブサイトを活用したデジタル博物館の開発、グーグルマップを用いた地図情報共有システムの開発、の三点について研究報告がなされた。渡辺氏はまちづくりに必要な情報を、(1)まちの実情を把握すること、(2)まちの将来の予測することと二つに整理した上で、GISを用いて情報を地図に落とし、空間的思考をすることの必要性を説いた。また、現在の情報環境においては、こういったシステムづくりが安価にでき、様々な領域で、様々な立場の人が共同作業を行う上で、非常に有効であることを指摘した。質疑応答においては、特に観光まちづくりの場面においてこういった技術を用いる場合、ユーザーからこういった反応が得られたかといった質問があった。



<まちづくり説明会・見学会> 15:30~17:15

丸亀町商店街再開発の最近の動向について

(高松丸亀町商店街振興組合理事長 古川康造氏)



古川氏からは、近年の丸亀町商店街再開発の状況について詳しく説明いただいた。前半部分では、丸亀町商店街再

九州支部との研究交流

日時：平成24年11月30日(金) 14:00~20:00

場所：福岡ガーデンパレス

プログラム：九州支部20周年記念事業

第1部 記念シンポジウム

第2部 記念祝賀会

参加者：約100名

開発に至る経緯やそのコンセプトについて説明があった。丸亀町商店街再開発計画の核心は「土地問題の解決」であり、土地の所有権と利用権を分離したことが本計画の最大の特徴としている。土地の利用制御については財産権の侵害にも通じることから、行政にはなかなか解決できない問題であったが、丸亀町商店街では地域コミュニティのつながりを利用して、土地の所有権と利用権を分離することができたと古川氏は説明する。また後半部分では、最近の具体的な再開発プロジェクトについて説明いただいた。丸亀町ではA~G街区までゾーンを区切り、それぞれのゾーンで「飲食」「医療」「美と健康」「ホテル」などのような業種の性格分けを行っている。具体的に「医療」では、内科の専門診療所を誘致し、県立中央病院や香川大学医学部付属病院から後方支援を受けることで、丸亀町マンションが病室としても使えるような仕組みをつくっている。こうした各街区での開発状況について説明をいただいた。その後、会場からは、丸亀町周囲の商店街をどう助けていくのか、テナントミックスをどう実現しているのか、といった質疑が交わされた。

見学会では、ドーム広場から最近竣工したG街区まで実際に丸亀町商店街を歩きつつ、古川氏に所々説明いただいた。



<懇親会> 17:30~19:30 (丸亀町・レガー口)

情報交換会、まちづくり説明会・見学会も無事終了し、有志で懇親会を行った。場所は、古川理事長のチョイスで丸亀町の「Grill & Wine Regalo (レガー口)」というお洒落なお店へ。瀬戸内産魚介や讃岐三畜、県産野菜と、地のものにこだわった料理を楽しませて頂いた。

出席者は、四国地方整備局関係者4名、大学関係者4名、自治体関係者2名(東かがわ市、坂出市)その他4名の合計14名で、大いににぎわった。また、様々な立場から、地域の活性化やまちづくりを熱く語り合う場となり、貴重な時間を過ごすことができた。愛媛大学名誉教授の柏谷先生が四国地方整備局のご協力のもとに始められたこの会。今後も継続して行っていくことを確認し、今年のこの会はお開きとなった。

(文責：高塚 創、西成 典久)

研究交流委員会所管の研究交流活動として、九州支部20周年記念事業に高井支部長と佐伯の2名で参加してきました。九州支部は中国四国支部のちょうど10年先輩で、今年創立20周年記念事業として、沖縄(9月)、大分(10月)、福岡(今回)と九州・沖縄縦断連続シンポジウムが開催されました。10年先輩だけあって、参加者数が非常に多く、また後藤会長もお見えになり、記念シンポジウム、祝賀会とも大変充実し、盛況でした。

プログラムは、14:00から17:30まで、第1部として基調講演(後藤会長) 報告(沖縄会場・大分会場の結果報告) パネルディスカッションが順次行われ、18:00から別室で第2部、記念祝賀会が開催されました。

記念祝賀会では、後藤会長の祝辞に続いて、高井中国四国支部長が祝辞を述べられ、佐藤九州支部長をはじめ、九州支部の皆様が大変喜んでいただきました。

連続シンポジウムのテーマは、九州の未来 - サステナブル都市のデザインでした。パネルディスカッションでは、「九州には多様な個性・文化があり、多極型構造だからこそ都市が活性化する」「九州ブランドなど九州の総合戦略が重要」「選択と集中による2極化ではなく、適正なピラミッド構造(広い裾野)が必要」等の意見が出されました。また、都市計画学会に求められる役割として、「多様な分野(13分野)の人が連携する強みの発揮」「個人(委員)ではなく、学会としての委員会等への関与」「グローバルアジアをけん引する九州支部の役割」「ローカルルール発信」など、多くの意見、アイデアが披露されました。

九州支部が海外、特にアジアに目を向けていることや、九州と中国四国との共通点が意外にたくさんあることなどを改めて知ることができました。

シンポジウムの概要は、九州支部のHPに掲載されると聞いていますので、ぜひそちらもご覧ください。

中国四国支部の研究交流委員会ができて3年がたちました。所管事業は、「他支部との研究交流」「地域活動助成」「各地域での自主研究会の支援」等です。まだまだ十分な活動ができていませんが、他支部や支部内の各地域の連携・交流を積極的に支援・推進したいと考えていますので、会員の皆さまの積極的な参加をお待ちしています。



(文責 研究交流委員長 佐伯 達郎)

第7回ひろしま自転車トーク2012

日時：平成24年12月9日(日)13:30~16:30

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ / マチづくりイスタジオ

プログラム：

【第1部】

基調講演「広島での自転車環境整備と利用促進のあり方」

広島大学 工学研究院 准教授 塚井 誠人

【第2部】

自転車トーク(パネルディスカッション)

<パネリスト>

- ・白石圭(NPO法人自転車活用推進研究会所属)
- ・塚井誠人(広島大学 工学研究院 准教授)
- ・波田健一(テレビ新広島 気象予報士・キャスター)

<コーディネータ >

- ・北村浩司(中国新聞社総合編集本部長)

参加者：70名

【第1部】

基調講演「広島での自転車環境整備と利用促進のあり方」

広島大学 工学研究院 准教授 塚井 誠人

基調講演では、広島市自転車都市づくり推進検討会の委員長を務められている塚井先生に、自転車利用の現状について検討会の情報も交えながらご講演いただいた。

[要旨]

- ・自転車は、エコな乗り物として数年前からブームとなっており、自転車保有台数は増加している。これを受け、広島市でも積極的な自転車走行空間の再編成の機運が高まっている。
- ・自転車は基本的に車道を通行すべきだが、空間的には車道を通行できるようになっていない。さらに、市内には河川が多く、橋上で走行空間が狭くなるという広島特有の地形上の問題がある。
- ・近年、交通事故全体に占める自転車関連事故の割合が増加している。事故の原因としては、徐行しないなどの安全運転義務違反が多い。自転車には免許証が不要であり、減点や反則金を課す制度がない。学校などの各種団体にルール周知や各種指導を行っているが絶大な効果が出るまでには至っていない。
- ・違法駐輪も大きな問題である。違法駐輪は、特に都心部で多く、自転車の利用台数と駐輪場の自転車収容台数を比べると、駐輪場が不足している。駐輪場の利用目的は通勤・通学が多くを占めるため、利便性の高い駐輪場では、平日昼間の時間帯は満車の状態が慢性化している。対策として、路上駐輪場や空き店舗の駐輪場への転用や、商業者に駐輪場整備を義務付けるなどが行われている。

【第2部】

専門家や地域のキーマンをパネリストとして、それぞれの立場から話題提供をして頂いた。その後、会場の参加者を交えてディスカッションを行った。

パネリストからの情報提供

白石圭(NPO法人自転車活用推進研究会所属)

自転車が歩道を通行する場合、歩行者の邪魔をする恐れ

があるときは必ず止まらなければいけないなど、自転車利用のルールや、自転車通行帯整備の事例などを紹介して頂いた。

波田健一(テレビ新広島 気象予報士・キャスター)

地球温暖化やゲリラ豪雨、台風などの異常気象の発生頻度は増加しており、これらは二酸化炭素などの温室効果ガスと関係があること、そこで私たちは、無駄なエネルギーを節約し、二酸化炭素排出の少ない自転車や公共交通機関に転換すべきであり、さらには、今後、交通弱者といわれる方が増える中で、車に頼らない移動手段を本気になって考えないといけないことなどを説明された。

パネルディスカッション

行政は、自転車利用を推進する理由のトップを「自転車は環境にやさしい」としている。これに対して、環境を考えて自転車に乗る市民は少なくギャップがある。ただし、行政の推進理由と、利用者が自転車に転換する理由が一致する必要はなく、最終的に環境のことも意識してくれたら良い。

- ・車を都市間交通で使うのは悪いことではない。ただ、都市内で移動するには、無駄が多いため車を控えて公共交通機関や自転車を使うようシフトしてもらいたい。



会場からの質問・意見交換

広島の都心部には非常に錯綜している場所がある。例えば、量販店の駐車場の出入口では、レイアウトの問題で自動車がたくさん列を作っており、自転車としては走り難い。自動車優先主義という地域の思想、考え方が問題と考えられる。利用者、研究者の方から改善をしていくというアプローチがもっと必要なのではないか

- 日本は自動車を中心としてきたからこそ、ここまで発展できたという側面もある。しかし、世の中の変化に合わせて、改善はしていかなければならない。施設や設備のレイアウトなども試行錯誤を繰り返しながら改善しているところであるが、失敗した例というのものもある。これからもそういった例が出てくるのではないかと思う。是非、積極的に「これは良かった」「これは良くない」と評価していただきたい。

駅には駐輪場が整備されているが、バス停の横にも駐輪場を作るという考え方もできるのではないか

- 駐輪場は場所に余裕があるところはできるだけ整備しようという方向に、少しずつなっていると思う。皆さんの目からみて「もっと良くできる」とお感じになっているところがあれば、どんどん声を上げていただきたい。

(文責 糸賀 文映)

講演・シンポジウムなど

広島郊外住宅団地ネットワーク・シンポジウム - 様々な担
い手との協力・連携を考える -

日時：平成24年12月4日(火) 14:00~16:30

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ

プログラム：

1. 開会挨拶

広島郊外住宅団地ネットワーク事務局 宮本茂

広島郊外住宅団地ネットワーク代表 宮本暁子

(社)都市住宅学会中国・四国支部(前支部長) 間野博

2. 団地問題解決の新たな主体の概要整理「イントロダク ションに代えて」

平野吉信(広島大学大学院工学研究科教授)

3. 事例報告

(1)高陽ニュータウン(安佐北区)と、広島県住宅供給
公社「高陽ニュータウン創生まちづくり基本構想」

岡崎俊(広島県住宅供給公社 常務理事)

(2)美鈴が丘団地(佐伯区)と、三井不動産リアルティ
中国(株)「Re:倶楽部美鈴が丘の取組」

呉田雅文(三井不動産リアルティ中国(株)

Re:倶楽部美鈴が丘所長)

酒井英治(三井不動産リアルティ中国(株)

Re:倶楽部美鈴が丘)

(3)スカイレールタウンみどり坂(安芸区)と、積水ハ
ウス「積水ハウスの『まちづくり』/『みどり坂』に
おける取組事例」

松村善朗(積水ハウス(株)設計部大阪設計室部長)

佐久間紳史(スカイレールサービス(株)社長)

(4)毘沙門台団地(安佐南区)と、社会福祉協議会「毘
沙門台団地の取組について」

永山義博(毘沙門台学区社会福祉協議会理事
(学区公衛協会長))

林裕(毘沙門台学区社会福祉協議会理事
(学区自主防災会事務局長))

(5)意見交換

主催：広島郊外住宅団地ネットワーク、(社)都市住宅学
会中国・四国支部

後援：(NPO)住環境研究会ひろしま、(公益社団)中
国地方総合研究センター、広島市、広島住まいづく
り連絡協議会、(公益社団)日本都市計画学会中国
四国支部、(一般社団)日本建築学会中国支部

参加者：105名

団地住民による課題解決に向けた意識啓発や取組は急務
であるが、外部の協力・連携を確保しながら取組を進めて
いくことが求められている。既に、広島でも、県住宅供給
公社、団地開発業者(デベロッパー)、ハウスメーカー、N
PO、社会福祉協議会等と連携した取組が始まっており、
こうした地元自治会・町内会以外の主体の取組内容、可能
性、課題について検討するため、開催した。

平野吉信(広島大学大学院工学研究科教授)

今日の郊外住宅団地は、現在住んでいる人の日常生活が
不便になりつつあり、これからの住民のコミュニティを支
える若い人たちもなかなか入ってきてくれない。これら
をいかに克服して、団地の明日を作っていくかが課題であり、
またその役割は、住んでいる人プラスの誰かが必要。地域
または共同体としての経営・管理=マネジメントが必要に
なっている。それなくして、郊外住宅団地の10年、20
年後はない。

高陽ニュータウン(安佐北区)

現在、多様な主体と連携して、買い物支援、子育て支援
施設誘致、医療機能充実に着手しており、まちづくり創生
市民会議も立ち上がっている。団地を活性化し、価値を創
生していく取組は、県公社だけでは実現できない。市民や
行政の支援が必要である。

美鈴が丘団地(佐伯区)

平成21年11月に「地域密着・三井ファンの再構築・美
鈴が丘団地の活性化」を目的とした拠点「リラックス美鈴が
丘」を開設し、平成24年4月から「Re:倶楽部」と名称を
改めた。定期イベント開催、店舗の2階スペースを住民グ
ループ等に無料開放、機関誌の定期発行、美鈴モール土曜
朝市の開催、住民への無料出張サービス(庭への散水など



「ちょっとしたお手伝い」
などを手がけている。街と
しての魅力づくりは、不動
産市場での価値につながり、
それが老後の生活に必要な
担保力にも関わってくる。

スカイレールタウンみどり坂(安芸区)

団地はまだ歴史が浅く、他の郊外住宅団地と状況は異な
るが、将来の課題を考えてまちづくりに取り組んでいる。
住宅団地は、作りっぱなしではなくコミュニティを作って
いく必要があると考え、そのために住民相互の親睦の場づ
くり、自治会の立ち上げ支援、光ファイバー通信網を活用
したネット上のコミュニティの場「ミニタウン町内会」開
設等を行っている。町内会と連携して行政に働きかけ、施
設誘致のための土地や建物の確保に協力するなど、支援し
てきた。こうした取組により、団地としての販売促進にも
つながった。

毘沙門台団地(安佐南区)

「近隣ミニネットワーク」を立ち上げ、高齢者の見守り、
高齢者パソコン教室、メンズサロン、畑でサロン、救急医
療情報キット配付等の取組を進めている。また、シニア勉
強会を年1回開催し、リタイアを迎える年齢前後の方々に、
町内会や社協の役員になってもらうよう働きかけしている。

まとめ(平野吉信(広島大学大学院工学研究科教授))

郊外住宅団地を支えるには、公助だけでは無理で、自分
たちによる自助も必要だが、住民と、住民を支援する開発
事業者、社会福祉協議会等と連携した「共助」も必要であ
る。団地が開かれた時代と異なり、今は状況に応じて適切
なマネジメントを行っていかねばならない。すぐには
変更できない行政上の要素も多いが、行政にも二人三脚の
ようについてきてもらう必要がある。



(文責 宮本 茂)

時代を語り建築を語る会

時代を語り建築を語る会実行委員会(代表者 石丸紀興)では、時代を語り建築を語る会と題し、戦後広島への復興建築の設計分野を担った第一世代を引き継ぎ、展開した、第二世代の代表的存在である錦織亮雄氏をお招きし、お話を伺いました。ここではその概要を報告いたします。

日時：平成24年12月1日(土)15:00~17:00

会場：広島YMCA国際文化センター本館408号室

1.はじめに

以前、大旗氏、村田氏、河内義就氏による戦後第一世代の話がこのYMCAで数回に分けて講演を行った。その結果は、李明氏の「広島の復興を支えた建築家たち」にまとめられている。戦後第一世代は復興を支えた建築家だが、その建築家を支え継承しながら活動されている世代が第二世代だ。

2.生い立ち

錦織氏は白島中町で生まれ、長寿園、太田川と親しんで育った。小学2年生で原爆にあったときも一家で長寿園に避難し、一晩半過ごした。

その途中で白島北町で負傷しながらも白島北町の町内会の人々がきちっと整列して消火活動を行っているのを目撃した。全身やけどで手から皮膚をぶら下げた何人もの若い兵隊の外れてしまったふんどしを付け直している二人組の女性も見た。あの地獄の中での人間の崇高さの経験が、人間観に大きく影響した。人の力は素晴らしく、人はいつも力を合わせるべきだと信じるようになった。



戦後、戦時設計などを中心に広島の復興が始まった頃には、満洲や朝鮮から帰ってきた連中ばかりで、激烈な戦争体験の持ち主だった。天皇陛下の終戦の詔勅で「戦陣二死シ職域二殉シ非命二斃レタル者・・・五内爲二裂ク且戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者・・・朕ノ深く軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難八固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕八時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビヒテ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス」とのたまわれて突然戦争が終わったが650万人もの日本人が中国や南方などの海外にいた。彼らが、たく氏の命を失いながら死に物狂いで帰国し、進駐軍の元で屈辱的な扱いや検閲を受けながら日本の復興に情熱を注いだことを忘れてはいけぬ。

昭和22年、小学生の時、に戦後に教科書に墨を塗る宿題をしていたところ、元軍人である父にそんな宿題を出す学校には行くなと、2年間ほど学校に通わせてもらえず、七

塚原の牧場で暮らした。毎日動物の世話ばかりしていたが、その頃、建築に進んでほしかったらしい父の命令でアメリカの住宅雑誌の住宅のプランを毎日1枚美濃紙にコピーしていたが、アメリカの住生活を知って驚いた。昭和27年頃、中学生の時には、スタートしたばかりの河内設計に出入りする機会があった。その頃に日本の商環境デザインの草分け的存在である京都工芸繊維大学意匠科の先輩である朝枝春介氏にも出会った。中学高校の間、何となく建築に進む助走期間のように過ごした。

3.就職、河内氏

京都工芸繊維大を卒業した後、一度大阪の三座設計建築事務所に就職したが、昭和36年に広島に帰り、朝枝氏の強い勧めで河内設計に就職した。

河内氏や村田氏が度々自慢をするのが、朝日新聞広島支局だ。戦後すぐの焼け野原にバラックで建てたものだが、チムニーを付けている。建築家とはそういうものである、というのだ。こんな何の役にも立たないものがついていることの意味を、小さい頃に出入りしていたころから何度も聞かされた。河内氏は、エコール・デ・ボザールで鍛えた中村順平の教え子であり、エコール・デ・ボザール流建築家の塊だったのだと思う。「建築家になれ」が口癖だった。



児童文化センターは、戦時設計時代の河内氏の設計だが、広島の復興は子供の教育や演劇、音楽、芸能から始めなくてはと、教員の団体が寄付を集めて作ったものだ。

河内氏は、横浜工業高校の出身で、演劇が好きで築地小劇場に通っており、それを模してちょっと大人っぽい児童文化センターの劇場を作ったのが自慢の種だった。

ただ、寄付でやったためお金がなく、多分どこかの老朽化した倉庫かなんかを持ってきて作ったものだから、すぐに老朽化してしまった。



4.時代背景

昭和25年頃から昭和30年代あたりの時代背景は、基町には多数の応急住宅があり、河岸には違法建築が立ち並び、その言わばスラムの中にパーなどいろいろなものがあって、結構人の出入りがあり、いま写真で見るとどこの国かとい

った感じだが、これが広島という感じがあって、ある意味懐かしい。大学の卒業設計のテーマは広島の都市計画で、広島市役所の銀山氏にお願いがってもらい、データを色々もらった。役所のしきいは学生にも低かった。その際この基町の河岸界隈をずいぶん歩いた。河岸の潮がひいた砂浜でたき火を囲んで飲み、子どもと一緒に集まってわいわいしているような空間だった。



また、まちなみがどんどん変わっている時代で夢いっぱいだった。



三宅一生氏にしても、榮久庵氏にしても、平和大通りの草っぱらに寝転んで夢を育んだ若き日を語るが、若者も市民も草っぱらや泥道に未来の夢を託していた。ただの草っぱらのため、道路であることを示したかったのか、名前をわざわざ大きく平和大通りと書いてあるのも面白い。



左は昭和26年、密集したバラックやお墓を切り拓いて平和公園を作った様、右は昭和30年の平和記念式典。迫力満点の平和記念式典で、家があってもものともしていない。



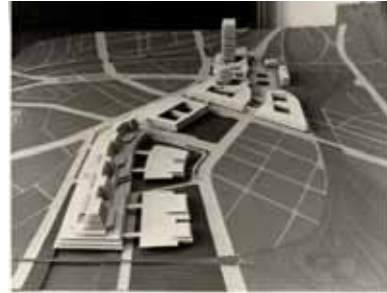
5. 河内氏のプロジェクト

バスセンターは、河内氏に言わせると色々なバスが乗り入れて一緒に使うタイプは日本で初めてで、当時広島一中の同級生で運輸省の高官である岡本悟氏と一緒に実現したものである。

また、その後岡本悟氏が参議院議員になった後も二人で

広島湾淡水化計画構想など、色々一緒にやっている。

猿猴川再開発については、昭和30年から40年くらいの間、河内氏がずっと構想を続けていたものだが、駅前が狭いので、猿猴川を暗渠にして、その上を開発し駅前を活性化するように考えていたものだ。



河内氏は、暁設計時代から農協ビル、広島市民病院、瓦斯ビル、医師会館、児童文化センターなど当時の日本の建築の最先端をいく建物をデザインしていたが、昭和36年くらいからは、急速に都市計画的な広域的な計画に傾斜していった。その図や模型づくりやデザインを含め、錦織氏たちが担っていた。

しかし、いくら当時であっても河川を埋めるのは乱暴な話であり、建設省河川局長や田中角栄にも直談判したが、実現はしなかった。大文字の建築といわれる時代は非常に意気軒昂たることでやっていた時代だった。

意気軒昂というと、暁設計時代には、仕事場で飲んで、最後に真っ赤に燃えたダルマストーブを皆で囲んで小便で消して帰ったという話を、河内、上野勇、松島泰などがすぐ自慢していた。また、市民病院の底をコンクリート厚4cmで打つなど、河内氏が発案し、松島氏が現場で実現するという、技術者集団というより意地っ張り集団がいっぱいいて、実現していったものだ。

合掌の形をした慰霊碑が平和大通りにあるが、粘土で模型をつくる際、弁当箱から粘土が出ないので縦に筋を入れて粘土を出したら、あの形ができたという。乱暴なことが多かったが若々しい。

6. 錦織氏の河内事務所時代の設計活動

河内設計には、当時生意気盛りで千日経ったら辞めるといって入ったのだが、ほとんど寝てないくらいの忙しさの中で東京や九州の仕事もやっていた。東京事務所を作ることになって東京派遣され、学生時代の友人の東京芸大の山田荘彦、岩崎駿介などを呼んで、河内設計東京事務所を一緒にやった。大学時代に、デザイン、計画系の建築学生会議を作って、先鋭な活動を行っており、そこで知りあった連中だ。ハノーバーの建築大会に論文を提出するのに伊豆の温泉で合宿したり、ハノーバーに日本代表で行黒川紀章の旅費を募金したりといったことをしていた。

宮浜温泉の石庭の第一期は、河内設計東京事務所が設計した作品だ。一つの建物で床を支える構造体と屋根を支える構造体を別にするという意欲作だ。



6. 河内氏のプロジェクトその2

1970年頃まで、河内氏はずいぶん大きな構想を考えていた。その最大のものが、1970年に発表した大広島県総合開発構想提案の一部の広島湾淡水化構想だ。広島湾を閉鎖し淡水化し、175平方キロ20億トンの水を得、広に新広島港をつくり、世羅大地が水不足なので世羅賀茂送水管で水をまわすという広島全体を救う計画だった。噴水で浄化するなら高さがどうか、潮の満ち引きで河床が見えないようにするとかを考えていたようだ。丁度1975年くらいから地方の時代と言われるようになったころのことだ。



7. 錦織氏の九州での設計

錦織氏は、その後河内設計で九州での仕事で、大濠公園横にホテルを作るという案を九州財界から請われ作ったが、実現しなかったため、博多湾に大レジューセンターとタワーを建てる提案を河内設計に求められることとなった。その時に錦織氏を書いたパースがこれで、これらのプロジェクトを主導していた当時財界の今家康といわれた経済同友会代表幹事だった藤川一秋に自分のもとで働いて欲しいとスカウトされることとなった因縁のパースだ。



8. 当時の広島的设计事務所の状況

設計事務所は当時広島に6つ位しかなく、どの設計事務所に誰がいて、どのような腕前かというのがみんなにわかっている状態だった。

河内設計に当時いた上野勇氏は、元は朝鮮総督府にあり、戦後広島当時で一番きれいな図面を描くのではないかと言われていた。戦前は、絹の上に烏口で書くという図面の美しさを競った世代だったのだと思う。この上野氏に学んだことが多い。錦織氏が設計していると上野氏がガルノーに乗せて設計している建築と同等のボリュームのものを探して見に行き、ボリュームやプロポーションを考えたり語った

りした。

役所の人も、腕前の良い方がおり、大野庁舎の時は、大芝水門の建設省の管理事務所が出来て、担当した人を探し、錦織氏が引いた基本設計の図面を、実施設計をしてもらった。

平和アパートの構造設計をしたことでも知られている藤本初夫氏が河内設計の構造設計を一手に引き受けていた。藤本初夫氏は藤本昌也氏の父にあたり、昭和町の平和アパートに折衝に行くと、錦織氏と同年である藤本昌也氏がおり、幼馴染のような感覚が今でもある。

9. 日本地域開発機構時代の錦織氏

昭和40年に工業整備特別地域や地域開発の必要性が叫ばれていた時期で、第三セクターの地域開発をする会社を東都製鋼(現トピー工業)の藤川一秋氏の発案で作ろうということになり、全国から色々な人を集める中に錦織氏も加わり、日本地域開発機構という会社が立ち上がった。

この会社は、名古屋を中心とした中部地域を中心に行き、蒲郡の元飛行用の跡の島を工業団地にしたり、田原町に工業団地で働く人のミニタウンを計画したり、木材団地を作ったり・・・そのようなことを、昼夜なしで昼は仕事、夜は赤坂の料亭で飲みながらやった。勇ましく元気な時代だった。

ただ、第三セクターになった頃から銀行などいろんなところから出向してきた人が多くなり、当初の生きのいい人々は錦織氏を含め皆辞めた。

10. 広島工業大学講師時代

その頃、広島工業大学で教えていた上野氏から誘いを受けて、錦織氏は広島工大で設計を教えていた。人数が多く、時間が足りないということで、家にまで学生が来て夜中まで教えるということをやっていた。

県立美術館を設計するのに、各事務所から代表が出て共同で設計するということがあった。まとめ役は佐藤重夫氏で、村田設計、白土設計などから集まってやった。河内設計は、当時東京事務所を辞めていた錦織氏が代表して出ることとなった。講堂の部分を設計した。

11. 都市建築研究所開設

そうこうしていると、河内氏から仕事を手伝えということになったので、河内設計事務所に復帰することにしようかと河内氏に相談したところ、反対され、昭和41年に28歳で千田町に設計事務所を開いた。河内事務所の千田分室として、当時せとうち苑や勤労者福祉会館などの仕事をした。

事務所を開いてから、錦織の名前での処女作は、広島相互銀行の創立者の森本亨氏の古江の自宅だ。デザインコンペで大成建設など数社にデザインを依頼したが、錦織氏の設計で、家の真ん中に蔵があり、周囲に家がくっついており、入口が二か所ある、そんな構成を気に入られ、決定した。後で聞くと、森本亨氏が若造に一生の家となる設計を

頼むのはどうだろうと、当時はまだバタンコ屋や削岩機屋だったマツダの松田恒次氏に訊いたら、新しいものを作る時は若い者がいいに決まると言われ恥をかけたということだった。その松田恒次の東洋工業がマツダとして飛躍する時代、元気な若者の時代だった。この家も、他人の手に渡し、近日中に壊される予定である。



大阪万博の頃までは建築で都市や国を構成しようという気概のある時代で、当時せとうち苑の設計でも錦織氏は大自然の法則であるシンメトリーにこだわっていた。また、庭も7つの川を象徴するようなものを作ろうと考えており、転がっている石も彫刻物で、空充秋氏の作品である。県立美術館の時も外壁を擬石にするという話があったが、森本亨氏に直訴して、当時施工されていた擬石を広島銀行まで車を飛ばし確認し、県庁に電話してくれ、石でいくことにしたものだ。庵治まで庵治石を取りに行き、構成したといういきさつがある。官民が一体であった。

1968年に5月革命、文化革命がおこり、大文字の時代が終わり、1972年にローマクラブの「成長の限界」に衝撃を受け、1973年にオイルショックがあり、1970年近辺で国家管理のパラダイムを考え直す時代にあった。

オイルショックの時に外国で仕事をするをはじめ、イランのパーレビー王朝の憲兵隊の家族の団地の計画をした。パーレビー王朝がすぐ崩壊したので実現はしなかったが、その後、都市建築研究所は、クウェートのハウジングオーソリティの仕事を作り、常に2人ずつ人員を派遣するというをやっていた。

12. 広島県設計事務所協会と建築士事務所協会の戦い

昭和47年に新幹線が岡山まで開通。50年には博多まで開通した。それを境にして日本が小さくなり、中央の設計事務所が広島にどっと押し寄せてきた。山下設計の中央図書館、映像文化ライブラリーなど。その時に、設計技術センターという協同組合を作った。

元々、広島での建築家の集団は、日本でも早い方で、昭和23年には広島県設計事務所協会を作っていた。しかし、専門志向が強く、資本から独立していなければならない、施工会社の設計部門は建築家ではないなどの意識が強く、専門の人しか入れない協会だった。

それとは別に昭和40年頃から専業の別なく全部まとめて建築士事務所協会を作ろうという動きが全国にあり、それがついに昭和50年に波が押し寄せ、中電技術コンサルタントの小川省三氏は建築士事務所協会派で、河内、村田、大旗、杉田などの諸氏と対立するという時代があった。とり合えば、広島県建築士事務所協会が設立され、全国建築

士事務所協会連合会(現日事連)にも加入したが、河内氏も会長になり、錦織氏も副会長をやりその体制で全国大会を広島で行った。しばらくは専門志向を続けていたが、専業では60社ぐらいのところを専業別なくとなると300社ぐらいになるなど、財政的な問題もあって、今の専業別なくの体制になった。

50年代の思い出というと、建築士事務所協会の中に青年部を作り、前岡氏、大旗氏、板倉氏など、若い人を集めて平和大通りの改造計画の提案や設計事務所対抗の運動会などをやっていた。

50年代の特徴は、都市美運動の時代で、昭和55年に都市美計画をたてるということで、人の心、自然、町並みの3つの美しさということでやった。都市美スケッチというのを描き、今不細工なものを将来どうするか未来絵図を描いた。

13. 質疑応答

Q. 河内氏から何を引きついたのか。

河内氏の時代は成長主義、進歩主義だったが、錦織氏は幼少期牧場で過ごしたという思い出から開発至上主義ではなく、原爆投下の時白島北町で皆が力を合わせて消火活動をしていた思い出などから、性善説、力を合わせたらどうにかなると考えていて、河内氏は専業主義だが、錦織氏は専業別なく多様な職域と多様な専門性が建築の中に溶け込んで協働作業しているというのが日本の建築の細部にまで行き届いた良さを作っているのではないかと感じている。

Q. これからの世代に伝えたいことは。

まだ昭和50年代までしか話していないが、これから昭和50年代の中ごろからバブルの時代が始まり、錦織氏の作品も華々しく展開していくことになる。

しかし、戦後は、いい加減といえいい加減、責任のあいまいさが良かった。

役所も民間も別なく一緒に協力して色々やっていた時代だった。今は区分や責任分化が厳密になりすぎ、結果として誰も責任の取れない閉そく感がある。

東北の復興にも、曖昧さやメタフィジカルなものが大切だと思う。

Q. 丹下健三や村野藤吾などと建築論が交わされてきたか。

河内氏は、自分のことを大衆文学者、丹下氏のことを純文学者と言っていた。同世代ということから意識し合っていたと思う。

しかし、作品と呼ばれる進歩・新奇の対象であるもので時代を語ってはいけないう。町は作品と呼ばれない仕事でほとんどできている。作品をもって建築の歴史をつなぐということに疑問をもつが、ほかに方法が確立されていないということでもある。

美しい都市というのは、デザインとかどうとかいうよりも、誠実に作った都市だと思っている。

広島に限らないが、誠実に作るというエネルギーをとにかく取り戻す必要がある。(文責: 福馬 晶子)

ホットコーナー

福島・相馬報告書 2

相馬市建設部建築課 福馬

私は2012年4月より福島県相馬市に派遣され、公共建築の建築に従事している。以前相馬での業務を報告したが、今回は、それぞれのまちの現在の状況と、聞き取りした被災された方の苦難と希望の話を雑記的に報告しようと思う。お読みいただいた方に何かひっかかれば幸いである。

1. 小高区(南相馬)

小高は、戦国時代に相馬の城があった場所である。野馬追の神事の部分はここで行われる。

福島第一原発が爆発してから、30km圏内である当地は、警戒区域・計画的避難区域となり、立ち入り禁止となった。

その後2012年4月16日避難指示解除準備区域、居住制限区域となるも、夜間の宿泊等は禁止されている。また、ライフラインも電気は通ったが、公共工事等は国直轄で行うこととされているため、上下水道が通っておらず、放射能の問題でゴミの収集も行われていないため、なかなか居住できるまでにならない。

道路上に倒れている家や車が除けられたぐらいで、様々な瓦礫が田畑や元家があったところに転がっているなど、いまだ被災時の状況を色濃く残している。

また、津波が来ていない場所でも避難しているため、人の気配が全くせず、世紀末のような雰囲気さえ漂う。少しずつ朽ちていっている。



2. 原町(南相馬)

全国的に放射能の被害を受けていることで有名になったため、全国からの支援が手厚い。外部から来た人でできたまちづくりNPOがいくつも立ち上がり、公園の除染やイベント、町の居場所づくり、復興web上マーケットなど、色々手がけている。今後補助金が切れた時にどうするかが悩みの種。

また、放射能への意識が高く、国の委員会などで意見を求められる機会が多い。除染の地元業者での対応方法の検討する組織などがつくられている。

3. 相馬市

海際の町や港が津波により被災。

平成24年度は、復興予算などがついた建物を片っ端から

作っているような状況だ。平成25年度も平成24年度設計したもの等の施工が相次ぐ。施工できる会社の数にも限界が来ており、発注難も続く。

津波の及んだ区域の災害危険区域指定は終わっているが、土地利用計画の変更については、現在案作成の段階であり、来年度の決定を目指している。

6.2mの海に向かった堤防に穴が開きまくっているが、やっと修復を始めた。7.2mにかさ上げした堤防とするそうである。港湾施設もやっと工事に取り掛かった。何度も掘り返していた下水道工事も終わってきている。高台の造成も始まった。戸建ての災害復興住宅も今年度中に完成予定。



4. 新地町

海際の海水浴場や旅館や港を含む町から市役所の1階まで被災。JRに乗っていた警察候補生がJRに同乗していた乗客を避難させ、全員を救ったことが有名になっている。

5. 新地町の朝日館の女将の村上さんのお話

朝日館で被災した際、地震の際、すぐに家の床から黒い水が噴き出したなど、すぐに液状化の症状が出た。

車で避難したときに踏切が締まったきりで押し上げて通ったが、その後トラックが止まって後の車が通れなかったなど、交通の避難状の問題があった。

また、防災意識として、三陸と違い、津波への意識はなかったとのこと。

避難所は、同じ町の人で経営し、食事も自らで作成したとのこと。支援物資も、避難所ごと、時間ごとに必要なものが変わったので、ソーシャルメディアで逐一避難物資を応募し、対応したとのこと。行政や赤十字では、平等を求めるあまり、物が揃わなければ、配布がされないという悪循環があったとのこと、今後の被災は、ソーシャルメディアの活用がネックになるのではないかと、とのこと。必要なものが即自的に支援したい人に分かるため、全世界から支援があるとのこと。

初のお彼岸で小豆と砂糖をもらい、量がなかったので薄いお汁粉を避難所で皆で作って食べたところ、夫が津波で亡くなったおばあさんが、緊張が解けたのか津波後初めて涙が出たとのこと。その話をブログで読んだ人たちより大量の小豆や砂糖が届けられ、次のお彼岸は大量のおはぎを作って配布したとのこと。

現在、避難された方は仮設住宅などに入っておられるが、新地の釣師地域では、おばあちゃんたちに毛糸タワシを作ってもらい、それをソーシャルメディアを通じて販売し、温泉や寿司などの遊興に使うことにより、引きこもりをな

くし、ストレスの解消をしているとのこと。

また、子供たちも支援物資に慣れてしまっている現状から、何でももらえることに慣れないよう、タウンマーケットという子供が企画して起業したマーケットをイベントとして開き、自主性と、お金を稼ぐということを学ばせているとのこと。

<http://asahikanok.exblog.jp/>



6.石巻市

海際の広範囲が津波により被災。また、内陸の市役所等も1階まで被災。自然排水であるため水が引かず、数日町が水に浸かったままとなる。

7.石巻 Zenkai 商店街鰻屋八幡屋女将阿部さんのお話し

石巻は中心市街地を含め1階部分が津波で浸水した。

商店街の建物の2階から津波の状況を映した動画があるが、車で避難していた人々があっという間に水に飲み込まれ、商店街の街頭や電話ボックスにしがみついて生き残った人が映っている。

石巻の町は排水が自然排水であるため、津波は数日間引かなかった。水がひいた後、商店街の1階及び道はがれきや泥でいっぱいだった。

しかし、瓦礫撤去の補助金やボランティアなどは住宅を対象としており、商店を対象としていなかったため、撤去資金で困ることとなる。

まずは被災直後から交差点で集まって色々な課題解決をしていた商店街の店主で集まり、Zenkai 商店街という組織をつくり、Tシャツを販売し、資金をつくり、がれき撤去にあてることとなった。そのうち、商店街を対象に来てくれるボランティアもできた。

2年目の秋、やっと店舗が少しずつ再開し、現在に至る。

<http://zenkai-rip.blogspot.jp/>

8.雄勝石で瓦を葺く四倉製瓦工業所の四倉さんのお話し

雄勝は雄勝石といって天然スレートを生産している町で、スレート製作工場があった。

津波で町ごと流された。

石倉さんは、石巻の事務所兼自宅1階は沈んだが、大丈夫だった。近所のおじいさんにネットで呼びかけ薬を取り寄せて水に浸かって持っていったりする支援をした。

水が引き、知り合いが近所で遺体で見つかるなどの悲哀を受ける中、雄勝の工場に行ってみた。やはり、工場も流れ、重い機械まで山の奥にまで流されていた。

しかし、不思議なことに、東京駅を葺くため製材し、梱

包した天然スレート瓦が、残っていた。

ボランティアを含めその天然スレート瓦の泥を井戸水で洗い、どうにか出荷した。

その後無事東京駅の屋根は葺かれ、震災の中で見えた希望として使われることとなった。東京駅の構内には、石巻の子供たちが雄勝石に絵を描いたものが送られ、展示してある。

現在、雄勝の町も全て流されてしまい、住民の方も仮設に分散して住んでいる状況だ。その中で、小さなプレハブで雄勝石の加工を始めた。

また、雄勝石をボランティアと集め洗い、元雄勝支所に保管しており、雄勝の町になることに使ってもらおうと考えている。

<http://yotsukura.exblog.jp/m2011-03-01/>

また、石森正太郎記念館の前に建つ旧石巻ハリストス正教会が1階部分をプレジャーボートにぶち抜かれるも、流出を免れ、市民に勇気を与えた。四倉氏は、その保存活動も行っている。

<http://rechurch-ishinomaki.blogspot.jp/>

また、雄勝の文化である太鼓を復活させようとしている。

<http://kurofunedaiko.blogspot.jp/>



9.千石船を守る会の邊見さんのお話し

津波前に石巻の発展の元となった千石船を古い町の旦那衆を中心とした郷土研究家で作った。津波で千石船は流された。古い町も流された。残された蔵を、解体前に、東大間野研や蔵研究家の渡邊氏と共に測量し、マップに残す取り組みをした。現在、観景丸や相馬中村文庫など、復興の工事で取り壊されそうな建物を、どうにか残そうと、東北大学や東北工業大学などを巻き込み、測量から始めている。



10.女川

こちら町全体が流されている。元の町は道以外は廃材の集積場と化しており、絶えず重機が動いている。

高台の運動公園に仮設住宅を建てている。

仮設住宅のひとつの集合が坂茂の設計によるものだ。

3階建ての集合住宅を数棟建て、その間にお祭り広場的

な建物、集会所的な建物を建てている。

集合住宅に関しては、コンテナを縦に積んだイメージとのこと。中には入っていないのでわからないが、ぱっと見はプレハブ建築っぽい。雪が降りこまないよう廊下には深い庇があり、階段にはスルメが干してある。

中心のお祭り広場の建物は、コンテナを柱に、テントを鉄骨でかけたもので、平面にして30m角ぐらいあるだろう。コンテナはカフェにするなど臨時的な部屋として使える。真ん中では家具が置いてあり、子供たちが集まって遊ぶとのこと。勿論イベントもするのだろう。

集会所もコンテナを両脇に並べた上に屋根をつけたもので、丁度地元の宴会が始まったところで、カラオケが聞こえてきていた。

もうひとつの集会所的な建物は、紙管でできた建物だった。



11. 気仙沼

市役所は少し丘の上にあったが、市街地の大部分が津波でさらわれた。現在、瓦礫は大分撤去されており、敷地の位置を示すための基礎が並ぶ中、道路のかさ上げが土でされており、一種異様な感じである。丁度雨が降った後に訪れたのだが、かさ上げされた道路以外は全て水に沈み、不思議な状態になっていた。周囲より少し高い鉄骨造の景閣というホテルは流れず残り、近所のみなさんも避難され、屋上からヘリコプターで救助されたのも記憶に新しいと思う。現在、修理しながらこの荒野になってしまった中に建つホテルは宿泊可能であり、宿泊してみると、生き残った人々の奇跡の気持ちを感じ、現在高いビル等を避難所に指定する動きが全国にあるが、効果があったことを感じる。

第十八共徳丸は、現在も陸に上がったままあり、今後モニュメントにして周辺地域を災害復興記念公園とする構想がある。周囲は荒野だが、観光客がバスでやってきて見学して帰っており、向かいにはコンビニがオープンしている。

<http://photo.sankei.jp.msn.com/panorama/data/2011/0618kesenuma/>



ホテルの周囲

第十八共徳丸の周囲。バスとコンビニ。

12. 気仙沼復興商店街のコロッケ屋のおばちゃんのお話

(お名前を伺わなかったため、ご本人がご自身を称された名称で記載します)おばちゃんは、バス停前でコロッケ屋をやっており、高校生などバス待ちのお客がよく来ていた。

震災の日かなり揺れ、油が床にこぼれ、ぐちゃぐちゃになってしまった。そのため、その片付けをしていたところ、近所の方が、「おばちゃん逃げろ」という。それでも、明日からの仕事のことを思い、ひととおり始末して丘を登ると、後ろから続く人はもういなかった。最後の一人かと思うと、ぞっとしたという。

その後津波が来て、全て押し流していった。

自宅は大丈夫だったので、避難した丘に、おにぎりを作って持っていった。

その後、商店主たちが集まり、土地を借り、復興商店街を作った。コロッケ屋さんは、ほかの方が経営されているところに店番をしている。元の近所の方が仮設住宅から買いに来たり、復興の観光に来た人や復興の応援に来た人がやってきたりする。話をするのが生きがいとのこと。



13. 南三陸町

こちらも市役所を含め町が全て流されている。

避難所とされている市役所の向かいの市民会館に避難した人々がかなり亡くなられた悲劇、防災庁舎で避難を呼びかけた女性が津波に飲み込まれて亡くなられた悲劇などが有名となった。

町は道路の瓦礫は取り除かれているが、防災庁舎を含めたくさんの瓦礫が建ったまま残っている。

丁度行った際は満潮時で、地盤沈下のせいも、防災庁舎の辺でも、水浸しだった。道路部分は最近十数センチかさ上げしたようだ。

広範囲であるが、瓦礫撤去が進められているとのこと。



14. 陸前高田

こちらも町全体が流されている。奇跡の一本松は現在撤去されていて、人は人っ子ひとりいない。木が抜かれた前には、青少年自然の家が無残に残っている。

奇跡の一本松とのことなので、松は1本しかないのかと思ったら、松林の松が数本残っていた。ただ、やはり塩を

被って立ち枯れているようだ。

被災し線路が破壊された JR 気仙沼線の線路をアスファルト敷きのバス専用道とし、BRT で仮復旧し、2012 年 12 月 22 日より歌津 - 陸前港間の運行を始めている。



BRT 専用道



海際で4階まで押し流されたマンション

15. 大船渡市

工業団地の辺が流されているようだ。

漁港及び漁業施設が建設中だった。津波に備えてか、RCの柱と床をもつピロティ式の人工地盤に建物を乗せたような建物だった。

16. 総じて

まだまだ復興には程遠い。瓦礫の撤去がされてるかどうかぐらいの差だ。復興住宅が2012年のうちに建築されたのがたった100戸という。(そのうち相馬12戸。国のお金によらず寄付で建てたものがさらに12戸)復興予算の執行がままならないと問題になっているが、ここまでの被害は、計画的にすすめるという方が無理だろう。片っぴしから人を突っ込み資材を突っ込み、ブルドーザー方式で少しずつすすめるほかあるまい。

【番外編1】東北紙芝居

ボランデポひろしま、まち物語制作委員会では、東北まち物語紙芝居化100本プロジェクトとして、福本氏を中心に紙芝居をつくり、仮設住宅や紙芝居イベントで演じている。最近では地域に根付き、地域で紙芝居イベントも行われてきている。取るものも取りあえず、町の文化である昔話と避難した浪江の佐々木ヤスコさんにお話を伺う機会があり、ヤスコさんの命がけで守った物語を紙芝居にして残していこうと決心したところから始まったとのこと。

昔話のほか、今回の東日本大震災で新たにできた物語を含め、残していきたい思いを紙芝居として製作している。

<http://matimonogatari.iinaa.net/touhoku/newpage2.html>

<http://www.facebook.com/pages/東北まち物語紙芝居化100本プロジェクト>

http://www.city.soma.fukushima.jp/topics_contents.asp?offset=10&kijino=9301446



【番外編2】相馬の歴史、景観への影響

江戸時代まで

相馬は、縄文・弥生時代から人が住んでいたが、鎌倉時代に下総国相馬郡を所領していた相馬氏が、文治5年(1189)源頼朝の奥州平定に従軍し、その功績によって奥州行方郡を与えられ、南北朝末期に移住し、領有権を拡大していった。近隣の伊達との決戦も有名で、伊達領に近い現在の相馬市の中心部にあたる中村氏の中村城に城を移したのは慶長16(1602)で、そこで江戸開府から明治までながらえ、相馬中村は城下町として醸成された。



中村城下絵図(元禄絵図)

江戸時代の災害(飢饉)復興、御仕法政策

江戸時代末期に天明の飢饉 1782 年(天明2年)から1788年(天明8年)や天保の飢饉(天保4年(1833))など、大規模な天災があり、元禄・正徳・享保の盛時には約9万人に達していた人口が、天明の飢饉後は、約3万6千人に激減し、藩では天明4年(1784)に幕府から5千両を借り入れ、移民を引き入れることなどで回復に努めたが、幕府からの借金が30万両を越え、人口的にも経済的にも危機を迎えていた。

藩政を立て直すため二宮尊徳の一番弟子である相馬藩士富田高慶は、相馬藩で報徳仕法に基づく御仕法(二宮尊徳の教えの至誠、勤労、分度、推譲を元に、具体的な自助努力や協働の方法まで定めているもの)により財政再建政策を担った。御仕法政策は、弘化2年(1845)から明治4年(1872)の廃止までの27年間行われ、領内3郡226村のうち101村で実施し、55村を完了し、江戸末期の政策廃止後は明治10年に会社組織である「興復社」を起し、報徳の教えに基づく開拓を進めた。

災害時の経済的に恵まれない藩の事業として、少ない予算で農民主体で意欲を持ち行える災害復旧として、経済的にも、人口増加政策、意欲向上として効果があった。

農村部では御仕法造(藩からの表彰で与えられる農家住宅から来ている)と呼ばれる農家が建築された。



農村部の風景。「イグネ(伊久根)」と呼ばれる屋敷森が見える。南相馬では今回の放射能汚染で切り倒されるという悲哀に合っている。



農家住宅。兜造り・腰屋根の母屋、置屋根の蔵が印象的。元は、母屋は茅葺、蔵の腰壁は木が主流。

報徳の教えでは、至誠、勤労、分度、推譲があるが、そのうち推譲は、分度という現状認識の上にとった分に応じた儉約をすることにより、将来などに譲ることを推し進めるという意味で、現在のボランティアにも通じ、二宮尊徳の仕えていた小田原藩桜町領で洪水が起きた時に、報徳仕法で恩を感じている相馬から、災害ボランティアを送り、復興の手助けをしたという事例もある。

その思想は、現在にも生かされ、二宮尊徳の教えに関連する市町同志で防災協定を組む、市民レベルで復興支援としてフォーラムを行ったりボランティアを送ったりする、などの助け合いとして、現在に通じている。

明治～昭和初期～震災前

明治時代以降は、士族の帰農が進められ、農地及び武家屋敷が一般へ販売されたため、武家屋敷は撤去され、商店等町屋が並ぶ町並みになったようだ。対し、海岸部では、明治時代には、観光が進み、東洋座という大きな旅館が建つなど、大いに賑わっていたようだ。



東洋座 中村街道の折り目より大手門までの町並みを俯瞰

その後、海際原釜では火災の復興で区画整理がS19～26に行われ、町中では駅前もS24-31、S55～H11と区画整理が行われ、その後近代化と過疎化で江戸時代の建物などはある程度淘汰されてしまったようだ。

3.11 震災が景観に与えた影響

地震、津波、放射能は甚大な被害を与えた。

相馬においても、3.11の津波で、流された町は、原釜地区、小浜地区、松川地区、細田地区、磯部地区が流された。元々は、漁業関連、火力発電所関連、観光関連の施設や住宅などが立ち並んでいた町だった。また、松川浦という明媚な景勝地でもあった。現在は、土地の位置を示すため基礎だけが残され、松林やドライブコース、堤防は倒壊し、無残な姿だ。洪水により田が塩をかぶり除塩が済まない地域においては、見渡す限り荒野が広がったような光景に変わっている。

人間の暮らす景観、自然景観、観光の景観など、景観を形成していたものが一挙に無くなった。色々の視点場から見えていた松林が無くなり、海が直接見えることになり、殺風景に思う、不安、喪失感を感じるなど、景観の変容により心理的な影響を受けたという感想がよく聞かれる。

【番外編3】佐渡のまち

年末に佐渡に行ったので、少しその話を。

江戸の建物などがまだ多数現役で使われている。写真両津港近くの旅館金沢屋。すこし傾いているが、120年の歴史が味わえる。



朱鷺現在182羽。うち60羽を放鳥。朱鷺は繁殖期に脇から出る炭の粉のようなものを体に塗りつけて、黒くなる。真っ黒でトキ色ではない朱鷺。おどろきである。



明治2年から昭和27年まで金を含む貴金属類を算出した佐渡金山。太古の遺跡のようだ。



赤泊。古い建物がひしめいている。



伝建地区宿根木。肩を寄せ合う木造建築の集落。風雪を凌ぐため、すのこ状の盾が設置してあった。



狭い路地が迷路への導入部分として人を誘う、異空間。千石船の廃材などで建てられた質素な建物群。

(文責：福馬 晶子)

会員紹介

塚井誠人(つかいまこと)

広島大学大学院工学研究院 社会環境空間部門 准教授

略歴

1973年生 / 広島県広島市出身 / 1998年3月 広島大学大学院国際協力研究科博士課程前期卒業 / 1998年4月 広島大学工学部第4類助手 / 2004年4月 立命館大学理工学部講師 / 2007年3月～現在 広島大学大学院工学研究科准教授
はじまりのこと

私と都市計画の関わりは小学生時代の終わり、昭和60年に遡ります。その日、手伝って下さった父の会社の方の運転で、住んでいた広島駅裏から引っ越し先のニュータウンまで移動する車中で、「広島の道路がいかに貧弱か」について、滔々とレクチャーを受けました。今思えば、緊張気味だった私を和ませるための世間話だったのでしょうか、なぜか妙に記憶に残りました。それからのニュータウン生活はまずまず楽しめたのですが、そこは従前の比較的都心に近いまちの生活とは、色々な意味で違っていました。この時期は、「生活と場所性」について考えつつ過ごした気がします。大学では交通計画を専門とする研究室に入り、多くの方に助けられて、大学に勤める機会をいただきました。

ここ数年のこと

印象深いのは、2007年に支部事業として受託された広島市の都市計画マスタープラン策定への参加です。生活の場の歴史性や、住民の方の思いを織り込んだファシリテーションを、会場を担当された高田禮榮さん(中電技術コンサルタント)の指揮の下で、手伝いました。それまでは都市や地域のデータを統計数学で料理する研究を専らとしていましたので、私にとっては、これがほぼ初めての「まちづくり」の現場体験であり、とても新鮮でした。しかし同時に、地域の方の声を具体的な施設や制度としてどのように社会に実装するか、そして地域の方に自分が「都市計画のプロ」として伝えるべき内容は何か、等の本当に悩ましい課題を発見し、新しい宿題をいただいたと感じました。

これからのこと

都市や地域は、そこに住む人々と同じ時を生き延び、少しずつ変わっています。私が学んだ土木計画学、地域経済学や数理統計学による都市計画は、まちを「量的な側面から設計する」技術であって、それはそれで有用な知見を与えてくれます。しかし他方で、まちの質的な側面=場所性や歴史性を設計する」立場は、すっぱりと抜け落ちていきます。後者に関しては、景観や歴史に関わる分野からのアプローチが大半ですが、本当にそれだけなのでしょうか？100年先を見据えた都市・地域づくりを、質的・量的な側面を融合して体系化し、技術継承することはできないのでしょうか？漠然としすぎて不可能にも思えますが、今は四苦八苦しつつ、その答えを探る研究に取り組んでいます。



後藤忠博(ごとうただひろ)

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
中国支店 事業企画部

略歴

広島県賀茂郡河内町(現東広島市)出身 / 鳥取大学大学院海洋土木工学専攻終了 / 昭和63年 株式会社オリエンタルコンサルタンツ入社 現在に至る

博士(工学) / 鳥取大学

技術士(総合技術監理部門)

自己紹介

大学院を終了して以降は、業務の中心はもっぱら交通計画です。技術士は当時流行していたTDM(交通需要マネジメント)を業務で行っていたため、これを書いたら、なんとなく受かってしまったという感じでしょうか。その勢いを駆って鳥取大学の社会人博士コースに通い、学位まで得ることができました。

学位論文のテーマは駐車場です。とても地味です。しかし、研究を進めていくと、意外と奥が深い領域でもあったと感じています。民間駐車場や公共駐車場が混在する都市内で、駐車場はいったい誰がどのくらい供給すればよいのか。よくよく考えると、なかなか答えを見出すことが難しい。多くの人の知恵を拝借しながら、駐車場の外部効果を考慮することで駐車場の適切な整備量や料金等が、なんとなくスルスルと理解できた気がしました。まさに私の中では目からウロコの状況でした。平成11年頃の話です。

その前後から、社会インフラの整備に向けて費用便益分析が賑やかになってきて、業務の中でも何件か取り組みました。これも社会インフラの外部性の話ですね。この経歴のため、国土交通省国土技術政策研究所で社会資本整備全般の評価制度について3年間携わることになりました。

さて、現在。広島に帰ってきて5年近くが経過しようとしています。中国・四国地方の都市・社会インフラの整備の方向性はどのようなもののでしょうか。インフラ整備が地域づくりを牽引する時代はすでに終わってしまっていて久しいと感じます。これからは、使う側の力によって地域が牽引される時代であってほしい。しかし、今はまだ使う側の力のまとまりは見えていない。できるだけ早い時期に使う側の力がまとまって、確かな流れになり、さらには、このような流れのニーズを見定めた、維持、改善が行われていかなければならない。そんなインフラ構築の時代が来るのでしょうか。次の世代へ、確かな中・四国地方を引き継げたら、幸せなことと思います。

文字ばかりの原稿となりましたが、今後とも、中四国地方の発展のために、微力ながら力を尽くして参りたいと思う次第です。投稿の機会を与您いただきましたニュースレターの編集委員の皆様へ感謝いたします。



今後の活動予定

岡山県内母子避難世帯を対象とする生活実態調査報告会

-平成24年度支部地域活動助成事業-

日時：2013年2月10日(日) 13:30~15:30

場所：岡山市民会館4階会議室

第一部：調査報告会

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故災害の影響による「母子避難世帯」を対象とした生活実態に関するアンケート調査報告

第二部：意見交換会

主催：岡山理科大学建築学科緒方研究室・松下研究室

2012年度第3回都市計画研究会

日時：2013年2月16日(土) 13:30~16:30

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ/研修室A

全体テーマ：災害に強いまちづくり

講演1：地震被害想定取組について(南海トラフの巨大地震など)

講師：広島県危機管理課主幹 原田英樹氏

講演2：東日本大震災を踏まえた地域防災計画の見直しについて

講師：広島市消防局防災課専門員 南浦詳仁氏

2012年度第4回都市計画研究会

日時：2013年3月16日(土)

会場、テーマ、プログラム等は、決まり次第、会員メール、支部HPでお知らせします。

2013年度(第11回)通常総会・支部研究発表会

日時：2013年4月7日(日)

会場、プログラム等は、決まり次第、会員メール、支部HPでお知らせします。

編集後記

みなさま、本年も当支部のニュースレターを何卒よろしくお願い申し上げます。

“レ・ミゼラブル”ヴィクトル・ユーゴー原作(1862年発表)の大河小説が劇場版ミュージカルとして昨年末に公開され、この正月に目頭が熱くなるのを覚えました。

主人公のジャン・バルジャンが妹の子供のためにパンを盗んだ罪で19年間服役し、1815年から仮釈放の烙印を捺されたまま生涯を閉じる17年間、身も心も新しい人間に生まれ変わると誓い、格差社会と戦い続けるのです。

そして、物語の最終章は、1832年のパリ。あの名画『民衆を導く自由の女神：ルーブル美術館所蔵』でお馴染みの1830年のフランス7月革命によってブルボン朝が倒れた後、国民王ルイ・フィリップによる立憲君主制に移行し、中流階級の暮らしが豊かになる一方で、格差と貧困にあえぐ労働者や学生たちは、自由で平等な社会の実現を求めて闘い、どんな暗闇にも明日はやってくる、明るい未来を信じようと“民衆の歌-リプライズ”を歌いながらフィナーレを迎えます。

丁度この時代の日本は、1856年の明治維新に向けて、幕末の時を迎えています。

この年明けから始まったNHK大河ドラマ“八重の桜”も然り、150年の時を経た現代の社会にも通じる明日の明るい未来を信じて生き抜く民衆の姿を描いたこのような物語が登場し、私達に感動を与えてくれるのは、まさに時代背景からなのでしょう。今の時代に求められて、必然的に登場したようにさえ思えます。

壊れたり、ねじれたりするだけでなかなか先が見えない動乱の社会から早く脱却し、確かな明るい社会の形が見えてくることを多くの人々が望んでいるのも事実でしょう。

昨年12月に衆院選が行われ、再び政権が交代しました。そして、丁度時を同じくして、本学会誌の特集が「政権交代と都市計画」でした。政治と都市計画は切っても切れない関係にあるようですが、次の参院選の行く末に、少しだけ不安を感じながらも、新政党には、ぜひとも国民が望む明るい社会を実現して頂きたいものです。

次号の配信は、5月の予定です。ホットコーナーやコラム、トピックスなど、学会員の皆様からの原稿をお待ちしております。何かございましたら、総務委員会事務局(藤岡総務委員長 e-mail: cp-fujioka@chiikikb.co.jp)までご連絡いただければ幸いです。

また、ご本人の了解が得られた講演会プレゼン資料につきましては、当支部HPに掲載させていただきますので、ご参照ください。

支部HP: <http://www.chiikikb.co.jp/c-plan/>

(文責:長谷山 弘志)

編集委員:長谷山弘志(編集長) 池田亜依、周藤浩司、高田禮榮、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也、吉原俊朗